『第 16 回国際エチオピア学会』参加報告書

平成 17 年度入学
派遣先学会：第 16 回国際エチオピア学会
宮田　寛章

１．学会について・学会に関するコメント

国際エチオピア学会は世界のエチオピア研究者が成果の発表・議論及び学術的交流をおこなうことを目的に、4 年に 1 度のペースで開催されている。今年は第 16 回目の大会にあたり、ノルウェーの地方都市トロンハイムのノルウェー科学技術大学において、2007 年 6 月 2 日から 6 日までの 5 日間にわたって開催された。参加者の専門分野は歴史学、人類学、政治学、経済学、社会学、言語学、生態学など多岐にわたり、また、国別の発表者数はエチオピアを筆頭に、アメリカ、ドイツ、日本、ノルウェー、フランスと続いた。

研究発表は「A 歴史学・考古学」、「B 人類学」、「C 政治・開発」、「D 都市研究・児童・ジェンダー・人権」、「E 言語学・文学」、「F 音楽・芸術」、「G イスラム・エチオピアオーソドックス・教育」、「H 映画」の 8 つのパネルにわけられ、計 56 つのセッションでおこなわれた。派遣者は第 4 日目に、「B 人類学」のパネルにて発表をおこなった。

風にたなびくエチオピア国旗とカテドラル

トロンハイムの美しい家並

２．派遣者の発表と質疑の内容

発表タイトル：『Use, management, and roles of homegardens: The case of the Ari in southwestern Ethiopia』

発表者名：Hiroaki Miyata

（発表要旨）

家屋に近接する農耕空間＝「庭畑」は世界の熱帯・温帯地域でみられる。エチオピアではエンセーテやコーヒーなどの在来作物を中心に構成される庭畑が主に西南部の高地において発達している。多くの庭畑に関する研究は有用植物の種多様性や作物品種の多様性、遺伝資源の *in-situ*（現場での）保全、及

び作物のドメスティケーションなど資源植物学的な側面が注目されてきた。しかし、人々が庭畑という空間や庭畑内の植物をどのように利用しているのか、また、庭畑が人々の生計の中でどのような役割を果たしているのかはあまり議論の対象とされてこなかったといえる。とくにエチオピア西南部における庭畑は、エンセーテ、ヤムなどの主食となる根栽作物が庭畑の主要構成要素となっているために、このことを明らかにする意義は大きい。そこで、アリの人々の居住域における庭畑を事例として、庭畑が人々の生計のなかでどのような役割を果たしているのかを、同じく主食を生産する空間である穀類畑との比較を行うことで明らかにすることを本発表の目的とした。

発表ではまず庭畑と穀類畑における人々の管理・労働時間配分および、それぞれの畑における主食作物の生産性と消費を定量的に検討した。その結果から「①庭畑内には主食となる根栽作物が生きた状態で多量に備蓄されている状態にあること」、及び、「②それら根栽作物は、特定の時期に収穫・消費、および管理・労働を集中させる必要が無いこと」という庭畑の２つの特徴を明らかにし、庭畑が人々の生計に弾力性を付与していると結論づけた。

（質疑の内容）

質問は「エンセーテを主要構成要素とした庭畑は一般的に生産性の高い空間と評価されているが、それはなぜか」「家畜と庭畑との関係はどのようになっているのか」といった生態的関心に基づくものが多かった。このような質問の答えになるような庭畑の生態に関する科学実証的研究はまだ十分になされておらず、これからの研究における課題となった。

また、庭畑が人々の生計において果たす役割を明らかにした結論に関連して、「庭畑にエンセーテが大量に存在するのは、人々の生計戦略の結果ではなく、彼らの文化的価値観を反映したものではないか」という質問があった。発表における結論は、庭畑の定量的調査結果から導かれた実証的な結論であり、この結論だけでは、人々が庭畑を形成する動機について明らかにできないことはいうまでもない。現在までの実証的理解を土台に、今後は質的調査をかさねていくことによって、庭畑に対する人々の考えや価値観などを検討していく必要がある。

３．学会参加により得られた新たな知見

国際エチオピア学会はエチオピアに関する幅広いテーマを扱っていながら、地域の特徴を生態・社会・文化の面から総合的に明らかにする地域研究の視点をもちあわせた研究は少なかった。しかし、各発表を聞くことを通してエチオピアのさまざまな地域と時代における社会的、及び文化的事象を知ることができた。また各研究における方法論なども今後自身が地域研究を進めていく上で参考になった。

４．その他学会の発表テーマを俯瞰的にみた感想・近年の動向について

国際エチオピア学会の発表テーマは歴史学や人類学などの伝統的分野に関するテーマを柱として、政治学、生態学、宗教学、都市研究、ジェンダー研究に関するものなど多岐にわたる。このような発表テーマの幅広さは、エチオピア研究が包含する研究領域の幅広さを如実に反映している。さらに近年では、グローバリゼーションや開発に関する現代的課題が新しい研究テーマとして次々にとりあげられ、エチオピア研究が射程とする分野はさらに拡大しているといえる。

また、全体的な研究領域の拡大化の傾向に加えて、個々の研究が複数の分野を複合・包摂していることも少なくない。例えば、James C. McCann は『Maize and the Agro-Ecology of Malaria: The Latest Evidence from Ethiopia』と題した発表において、蚊のミクロな生物学的生態学、地域の農業生態学、地域を取り巻くマクロな生態史といった様々な視角からの知見を縫合することで、過去にエチオピアで起こったマラリア流行過程を説明した。今後このような既存研究領域の複合化が、上記の拡大化とともに進展していくことが予想される。

５．今後の研究に今回の学会参加がどのような影響を与えたか

発表前後に、様々な研究分野の人々から派遣者の研究に関する質問やコメントを受けた。それらの多くは社会的及び文化的文脈のなかでの庭畑の位置付けに関するものであった。また庭畑の歴史的な形成過程のような、派遣者が意識していなかった興味深い視点もあり、研究の方向性に関するさまざまなアイディアを得ることができた。今後は地域における庭畑の多重的な意味を明確化するために、地域の生態・社会・文化的文脈の中に庭畑を位置づけるという作業をおこなう必要性があること強く意識した。

深夜 0 時のトロンハイムの街